

編集人 清水節義
発行人 塚田平治
発行所 白根町公民館
印刷所 笹勇印刷所

教育委員会の發足に當りて

教育委員長 室崎佐喜男

私達の子供がよい教育を受け
私達の町が恵まれた教育環境に
あるようみなで相談して、そ
の地方の特色や実情に合致し、そ
の教育の仕事をやるのが今回出た
ました教育委員会でありました。

◇わが町の学校
小中学校の新築増築の焦眉の
急に迫っている事は余りにも深
刻の問題であります。小学校は
就学児童の漸増に教室が不足し
て、図書室に遠教室を設ける状
態であり、中学校は寺小屋より
少しは増した程度の暗々とした至

いつの間にか東の山々は雪
化粧を施し刈田の株は冷雨の雨
々々とき、やがて来る冬将軍
を淋しい気持ちで待つと云ふ時期
になったが一面農家に取つては
春からの努力が実を結んで漸く
一息、せめて多量で過せるとい
ふ所謂待望の初冬でもある。
然し今年には常には云はれてい
る「百姓の去年作り」ではないが
豫想以上の減収であり香しい
結果ではなかつた。年間を通じて
一年大切な稲の生育期に於ける
寡照多雨と冷温が禍して戸々の
農家によつては多少の差こそあ
れ大ざっぱに見て平年より一

が多くの近視の生徒が増しつ
つあります。昔の大きな字の書
物と遠く事を念頭に大で考え
るならば誰にも分るのでありま
す。又風雪の危険性も今より考
慮に入れておく必要があると思
います。高等学校の事にも一言
觸れさせていただきます。白根
町立理科女学校の廃止から既に
五ヶ年、二十五年の永い歴史を
もち白根近郷の女子教育に貢献
した大きな足跡を思う時惜しま
れてなりません。それに代るべ
きものと云う程でありませんが
新津高校の分校として定時制の
高等学校の設立を見たのであり
ます。現在は中学校の附上に夜
間のみ教授されていますが、六
年級で百六十二名、内男子百二
十九名、女子三十三名となつて
いて、炎熱のさめやらぬ夜も凍
りつく吹雪の夜も学びの灯りを
絶やさないであります。
◇わが町の学校
主眼を置きませんが、社会教育は
實際生活に即した文化的教育を
高める環境を作つて民主的な市
民を育成する事にあります。わ

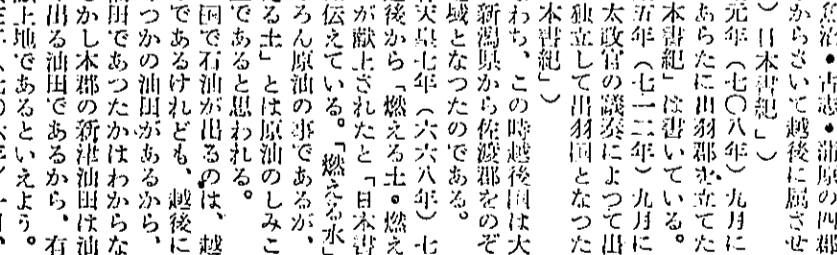
が町に於きましては公民館活動
の一翼の形で社会教育が実施さ
れ来たのであります。教育課
産業部、社会部、芸術部、厚生
部等、それ／＼相当活発な活動
をされて来たのであります。
中には無数の寄付のある公民
館にもたれかかつてしまひ団体
の自主性がうすくなつたのもあ
ります。温室育ちでは健全な成長
はありませぬ。社会教育の実践
にあつては社会教育委員会の設
置は欠く可からざるものと思ひ
ます。
この社会教育委員会によつて
総合計画を樹立します。公民館
を含めて各団体が計画を持ち寄
り社会教育委員会でもとめられ
れば能率的な組み合わせが出来
しかも生き／＼とした社会教育
の面が展開する事を確信してお
ります。

収穫を終へて

一万五千一、一万五千五百俵止り
ではないだろうか。これを金額
にして見ると本年は例年と違つ
て米価は精算法故米の等級にも
よるが大體一俵三千円として一
万五千俵の供出があるとすれば

四五千五百万円、これに対する
早場米奨励金が約三百万円、合
せて四千八百万円入つて来る。
此金を供出対照農家約二百戸に
平均すれば一戸当り二十四万円
となる。この数字は米価が上つ

紙上デッサン展 ②



「冬」 二之丁 外川利雄

つある事を考えれば、余程腹
帯を締直してやらねばならぬ
事である。
こんな風に視る時一寸農家待
望の初冬も心細い事の様である
しかしいたづらに悲観ばかりも
して居ても事実はなんとも致
し方のない事、この冷厳なる
現実を直視し、出来る限り來
るべき農閑期の効率的利用を計
ると同時に來年度の豊饒計画樹
立に万全を期して邁進しなければ
ならない。それにはいたづら
に天候にのみ頼らずとも、
眞剣に、そしてより化学的に研
究努力しなければならぬ事は云
ふ迄もなく、と共に計画経済を

伊丹末雄
(参考までに記しておくなら
ば、今年五月関西大学において
おこなわれた万葉学会の第一回
研究発表会に、富山大学の和田
徳一氏が主張されたところの、
「万葉集」中の「伊夜彦」は「伊
夜立山」の誤写されたものであ
る、すなわち「伊夜彦」ではな
くて「立山」であるという説は
何等確かな根拠をもたぬ妄説に
はかならない。心ある学者の一
緊を期待するものである。)
後(平安時代)の「令義解」
を見ると、越中と越後の境界は
川であると言われているから阿
賀野川が越二国を分けていたと

三平安時代
延喜元年(九〇一年)にできた
延喜式に、越後の国の賦として
瀨海・八咫・磐石・名立・水門
佐味・三島・多大・大家・伊神
が書かれている。その中瀨海は本郡
(會野木村辺)の地名であるといわ
れる。
同じく「延喜式」に蒲原郡の神社
十三が記されているが、本郡の社と
しては
青海神社(二座・宇部良波志神社(
橋田村)・日飯野神社(金津村)
がある。(「青海神社」が加茂町(
蒲原郡)のそれであるかいはは
調査未了。)
延喜元年(一一八二年)、信太三
郎義成が羽の源義仲のために越後の
兵を指揮してしばらく越前山に上
り、またその後小野城に上り、
(平安時代)は越後、特に本郡史上の
暗黒時代で、記すべきものとしては
如上の二三事があるに過ぎない。当
時の蒲原郡のようすなどもほとんど
査されていないようである。後の賢
者の御努力を乞うのみ。)
四鎌倉時代
文治二年(一一八六年)二月、後
白河法皇は源頼朝に命じて「自分以
下の因東などの領地の税(米)の未
納を催促させた。(「吾妻鏡」)そ
の時の越後の地名の中に、本郡の
菅名荘、六条院領、預所目岐判官
代推察
紙屋荘 殿下御領、預所播磨局
大槻荘 院御領(以下は一部分が
本郡に入つてゐる。)
青海荘 高松院御領
加治荘 金剛院領、堀河大納言家
沙汰
弥彦荘 二位太納言家
が見えている。この地名は昔からあ
つたのではなく、「和銅抄」によれ
ば蒲原郡の郷名には
日置・板井・勇礼・青海・小伏・
弥彦(「拾芥抄」によつて補う)
があり、沼垂郡の郷名には
沼垂・足羽・加地があつて、一國
を区画するに於てはすべて郡郷の制によ
つたことがわかる。ところが平安時
代に賜田・功田・寺田・私懸田等の
制が定められると、その領地を何々
荘(「荘」はいなかの意味)といひ、
これをつかさどる人を荘長・荘司
などといったので、長い間おこな
れてきた郷名は次第に世の人に忘れ
られ、荘名だけ残される様になつた
そのために、荘の中に郷があり

保の中に荘があり、郷と荘で呼ばれ
る土地もあるようになった。(今の
白根郷・新津郷などの「郷」はこゝ
から出ている。)
文治三年(一一八七年)、源義経
は兄頼朝と対立し、奥州(岩手県)
の藤原泰衡を頼つて北陸道に北に進
んだ。(「平家物語」・「吾妻鏡」・
「保曆間記」・「義経記」)たゞし
「義経記」は直江津から舟に乗り、
寺泊に上陸したと書いているし、「
吾妻鏡」は伊勢(三重県)・美濃(
岐阜県)を経て奥州にのべれたと記
している。おそらく本郡の北を通過
したのであろう。
文治五年(一一八九年)七月、征
夷大将軍源頼朝は義経をかくまつて
いる藤原泰衡(秀衡の子)を征伐す
る軍をおこし、比企能員・宇佐美実
政が武藏(埼玉県)・上野(群馬県)
の軍を率え、越後の兵を加えながら
北陸道を出羽(山形県)の鼠ヶ関に
向つた。すなわち軍勢は本郡を通過
したわけである。
建久四年(一一九三年)十一月、
越後守護安田実資があることから頼
朝に殺され、佐藤経義が越後の
守護となり菅名荘与えられた。(「義
忠の子忠孝は藤原守と称し、菅名城
(川内村)を築いて住んだ。そこで
子孫は菅名氏を称し、戦国時代に及
んでゐる。)
承元元年(一一三〇年)二月、僧
源空(法然)と門人等が京都におい
て専修念仏を熱心に教えひろめた
ために、他の宗から訴えられた。その
結果法然は土佐(高知県) (実際は
讃岐(香川県))に、弟子の親鸞は
越後国府(中頸城郡直江津町。後に
春日村へ移つた)に流された。(「
三長記」・「明月記」・「皇朝紀抄」
・「教行信抄」・「歎異抄」等)
註 前号拙文中の「日本書記」の
「記」は「紀」の誤植。

